

不登校経験をもつ大学生の成長過程

浮田あすか・福島 裕人・長谷川 晃

要 約

大学入学以前に不登校を経験した大学生の成長過程について、2つの研究から検討を行った。研究1では大学生の不登校経験群20名と未経験群87名に質問紙調査を実施した。群間のレジリエンス尺度の得点を比較した結果、「コンピテンズ」「肯定的評価」「親和性」「総合計」において差に有意傾向が認められ、不登校経験群の方が得点が低かった。しかし、不登校経験群の中でも不登校経験のポジティブな側面に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かった者は現在のレジリエンス得点が高く、不登校の予後が良いことが示唆された。研究2では不登校経験をもつ大学生3名に面接調査を行った。調査の結果、参加者は不登校経験から生じる不利益を認めながらも、そこに自分なりの価値を見出していた。以上より、不登校の予後を改善するためには不登校経験の意味づけを変えることが重要であると考えられた。

Processes of Growth in University Students with Experience of School Refusal

UKITA Asuka, FUKUSHIMA Hiroto, HASEGAWA Akira

Abstract

Two studies examined the process of growth in university students with experience of school refusal before entering university. In Study 1, a questionnaire survey was conducted with students that had experienced school refusal ($n=20$) and students with no such experience ($n=87$). The Resilience Scale for Students (RS-S) was administered to the two groups. In addition, participants in the school refusal group responded to an assessment of making meaning out of stress, and feelings of stress-related self-growth. Results indicated marginally significant differences in "Competence," "Positive evaluation," and "Intimacy" scores, as well as in total RS-S score, suggesting that the former group had weak resilience. However, participants in the school refusal group, who interpreted school refusal experiences as also including positive aspects, or felt self-growth because of the experiences, scored higher on certain subscales of the RS-S. In Study 2, interview surveys were conducted with three university students that had experienced school refusal. In the interviews, participants acknowledged disadvantages resulting from their school refusal experience, however they also found some benefits. These findings indicate that in order to improve the prognosis of school refusal, it would be important to change the meanings of school refusal experiences.

問題と目的

不登校児童・生徒とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義されている（学校不適応対策調査研究協力者会議，1992a）。平成24年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」においては、小中学生の不登校児童・生徒数は11万人を越えており、今日の学校教育現場においても不登校の問題は依然として大きな課題である（文部科学省，2013）。

不登校に関する研究はその呼称の変遷とともに多くの研究者によって行われてきた。不登校の原因を家庭や個

人、学校に求める一方で、1980年代以降は現代社会の経済成長や核家族化などに伴う社会文化的な要因に言及した説も現れ始めた（高木，1984）。また、文部省（現文部科学省）の「登校拒否（不登校）はどの子どもにも起こりうる」（学校不適応調査研究協力者会議，1992b）という見解から、不登校は個人のパーソナリティや家族あるいは学校の病理といった特定の原因に起因するものではなく、現代社会全体の問題として見過ごせない状況になったという見方が浸透していった（伊藤，2009）。そして、「学校に行かない生き方」が公の現象として認知されると同時に、教育支援センター（適応指導教室）といったような不登校対策としての支援が広まるきっかけとなった（伊藤，2009）。

このように展開されてきた不登校をめぐる問題は「子どもは学校に行くべきであり、周囲の大人は不登校者を学校に戻すために手を尽くすべき」とする主張と「子どもは学校に行かなくてもよいのであり、学校の他にフリースクールなどの選択肢を認めるべき」とする主張の二つに分けられる(貴戸, 2004)。前者は不登校を「病理・逸脱」とし、不登校の克服・治療を志向する専門家や実践者たちの主張である。一方後者は、不登校は人生の選択肢のひとつであるというフリースクールの立場から不登校を肯定する主張である。これを受けて松坂(2010)は、不登校児童・生徒本人に対する“不登校問題の解決に向けた取り組み”には、「不登校児童生徒の不登校状態の解消が、非当事者が目指す不登校問題の解消や利益のための手段となっている文脈」と「不登校児童生徒個人の人間的发展成長を促進するために、不登校経験と回復過程をその手段とする文脈」の二つを想定している。彼は、不登校児童・生徒本人と接する人々は無意識的にこの二つの文脈を行き来して、不登校の解決に向けた児童生徒との共同関係の構築を阻害する要因となっている可能性を指摘している。

こうした不登校の肯定・否定に関する論争は不登校を経験した本人以外の人々がそれぞれの立場から行っており、双方の立場が当事者の声に耳を傾けながらも、当事者の現実感に即した語りは抑制されたり、聞き取られないことがしばしばあった(貴戸, 2004)。そのため、不登校に関する問題は非当事者による「問題か否か／肯定か否定か」といった論争を展開していくだけではなく、不登校を経験した当事者による語りが必要であると考えられる。しかし、不登校経験者によって語られる不登校経験の内容に注目しそれを分析する研究は多くは存在せず(大嶋, 2005)、不登校経験のある児童・生徒がその後どのような生活を送っているのかといった予後に関する調査や研究もあまり進んでいない(松井・笠井, 2012)。不登校を通じて本人の成長が促進されたり生き方の模索の契機となっても、不登校が継続することで生じる不利益やマイナス面も確実に存在し、その二面性のどちらも無視することはできないと考えられる。すなわち、伊藤(2009)が指摘するように安易な成長期待や根拠のない楽観主義で不登校への対応を誤らず、しかし前途に希望を抱きながら不登校児童・生徒を社会につなげていくための支援が必要となってくる。

そのため、不登校経験をもつ者が自らの言葉で不利益を認めながらも肯定的に不登校を振り返り、自らの人生のなかにもどのように位置づけているのかを検証することは十分に意義があると考えられる。また、不登校経験者が不

登校当時に受けたサポート状況も併せて調査を行うことは今後の不登校支援を考える手立てとなり、不登校経験がどのようにその者の人生に活かされていくのかを探る方法のひとつになると考えられる。松坂(2010)は、不登校経験をもつ10代後半から20代中盤の学生や社会人13名に面接調査を行い、彼らの不登校経験を成長途上の段階であると捉えて、その後の人生にどのように取り込まれていくかを調査した。しかし、彼の研究では不登校のサポートに関する検討が明確に行われていない。松井・稲垣(2008a)は、不登校経験をもち、現在は自らが不登校サポートに携わっている青年へ面接調査を行っているが、不登校経験をその者の人間的発達として捉える視点が不十分であると考えられる。

本研究では不登校経験をもつ者のなかでも比較的社会適応水準が高いと考えられる現役の大学生を調査の対象とし、彼らの不登校経験からの立ち直りの過程に焦点を当てる。本研究で大学生を対象とする理由は以下の通りである。第一に、不登校から生じるマイナスの影響を現在もなお大きく受けている者への調査は困難である点である。不登校そのものに意味が見出されるのは、症状が改善されその苦しみを過去のこととして振り返られるようになってからであることが多いと指摘されており(伊藤, 2009)、現在大学生として生活している者は不登校予後の状態が比較的良好で、不登校経験を過去のものとして捉えることが可能であろう。そのため、不登校の経験について詳細に語ることで、将来的な見通しにも繋がる微細なデータ収集が行える。第二に、不登校からの回復過程の検討が可能である点である。現代の不登校像の多様化や個人差を考慮すると、大学生に限定した不登校経験者への調査から不登校問題全体の理解を深めることは極めて限定的なものとなることが指摘できる。しかし、大学に通学できている者はそれ以前の不登校経験から回復できていると考えられるため、その回復過程についての調査が可能である。

具体的には、本研究では大学生全体を対象に、不登校経験の有無が及ぼす影響を検討する質問紙調査と、不登校経験をもつ者への面接調査の2つを行う。研究1では、「弾力・回復力」や「心理的ホメオスタシス」とされるレジリエンスという概念を取り上げる。不登校を経験することは、学習の遅れや、登校しない(できない)ことへの罪悪感、進路の不安といったことから多くの不利益を生み、困難な状況を数多く作り出すため、不登校経験群はレジリエンスの得点が低下していると予想される。そこで不登校経験群と未経験群のレジリエンス得点の比較を行う。また、不登校経験をもつ大学生において

は、その経験をどのように捉えているか、その意味づけ方や自己成長感を測定する。それにより、現在の不登校経験に対する意味の付与やそこから起因する自己成長感の得点の高さが、レジリエンスの得点の高さと関連するのかが検討する。これらを通じて、過去の不登校経験への意味づけが現在に影響を及ぼしているのかが検討する。

研究2では過去に不登校経験をもつ現役の大学生に対して、不登校経験に関する面接調査を行う。研究1では得られなかった点を質的な側面から検討し、彼らが不登校に至った経緯から、不登校当時に受けたサポート、不登校経験の意味づけ方、将来への展望などを明らかにする。不登校経験者による不登校経験への意味づけの仕方と、その意味づけ方の変化の過程および不登校経験からもたらされる利益や、彼らなりの大学進学や将来に関しての展望を探索する。そして質問紙調査で得られた結果と比較しながら考察を行い、不登校経験において意味づけ方を変化させることで予後の改善へと導ける方法を探索する。

研究1

目的

本研究では「弾力・回復力」や「心理的ホメオスタシス」とされるレジリエンスという概念を取り上げる。不登校を経験することは、学習の遅れや、登校しない(できない)ことへの罪悪感、進路の不安といったことから多くの不利益を生み、困難な状況を数多く作り出すため、不登校経験群はレジリエンスの得点が低下していると予想される。そこで不登校経験群と未経験群のレジリエンス得点の比較を行う。また、不登校経験をもつ大学生においては、その経験をどのように捉えているか、その意味づけ方や自己成長感を測定する。それにより、現在の不登校経験に対する意味の付与やそこから起因する自己成長感の得点の高さが、レジリエンスの得点の高さと関連するのかが検討する。これらを通じて、過去の不登校経験への意味づけが現在に影響を及ぼしているのかが検討する。

方法

調査対象者 東海地方の四年制私立大学の学生を対象に質問紙を配布した。有効回答者数は107名(男性39名、女性68名、平均年齢20.82, $SD = 4.14$)であった。調査対象者が自身の不登校経験を過去のものであると捉えて距離をとって振り返ることができるように、本調査での不登校経験とは大学入学以前のものであると定義した上で、2年生以上の学生が受講する講義内で質問紙を配布し回答を求めた。1年生は大学入学からの時間経過が短く、不登校経験を過去のものとして捉えることが困

難であると考えられたため、調査対象から除外した。

質問紙の構成 ①フェイスシート：所属学部・学科・学年、年齢、性別の記入を求めた。

②不登校経験の有無：回答者全員に、不登校経験の有無を尋ねた。不登校経験を有する回答者に対しては、不登校を経験した時期と不登校が継続した期間の記入を自由記述形式で求めた。

③大学生用レジリエンス尺度 (Resilience Scale for Students: RS-S; 齊藤・岡安, 2010)：「困難あるいは脅威的な状況にも関わらず、うまく適応する過程、能力、あるいは結果」であるとする Masten, Best & Garmezy (1990) のレジリエンスの定義より、心的外傷体験をストレスラーとした自己評定式尺度である。「コンピテンス」(環境と効果的に相互交渉する能力のことであり、効果的な変化をもたらすことができるという自己評価)、「ソーシャルサポート」(個人に対して与えられる多次元の実際的な支援とその資源のこと)、「肯定的評価」(何らかの事象に対してより楽観的あるいは肯定的側面を重視して評価すること)、「親和性」(他者あるいは状況や場所に対して肯定的に接することができる特性)、「重要な他者」(個人の人生において重要な意味を持ち様々な側面に影響を与える人物のこと)の5因子、25項目に対して4件法で回答を求める尺度である。回答者全員に回答を求めた。

④ストレスに対する意味の付与尺度 (宅, 2005)：「ポジティブな側面への焦点づけ」、「出来事を経験した自己に対する評価」、「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」の3因子、13項目に対して4件法で回答を求める尺度である。不登校経験を有する者のみに回答を求め、過去の不登校経験についてどのように感じているのかが回答させた。

⑤ストレスに起因する自己成長感尺度 (宅, 2005)：4項目から構成され、4件法で回答を求める尺度である。不登校経験を有する者のみに回答を求め、不登校を経験した前と後を比較させ、変化したと感じる点について回答させた。

分析方法 不登校経験がある者となない者とに分けて、レジリエンス尺度の下位尺度ごとに平均値と標準偏差を算出した。また、不登校経験の有無で得点に差があるのかが検討するためにt検定を行った。不登校の経験を有する者に対しては、意味の付与尺度と自己成長感尺度への回答を追加で求めたため、その平均値と標準偏差を算出した。最後に、不登校経験者のデータを用いて、レジリエンス尺度・意味の付与尺度・自己成長感尺度の得点間でスピアマンの順位相関係数を算出した。

結果

不登校経験の有無や特徴 Table 1には不登校経験の有無, Table 2には不登校を経験した時期, Table 3には不登校の継続期間を示した。

不登校経験群と不登校未経験群のレジリエンス尺度の得点 不登校経験群と未経験群の間でレジリエンス尺度の得点に差があるかを検討するために *t* 検定を行った。その結果を Table 4 に示した。「コンピテンス」(*t*(105)

= -1.68, *p* < .10), 「肯定的評価」(*t*(105) = -1.93, *p* < .10), 「親和性」(*t*(105) = -1.73, *p* < .10), そして5つの下位尺度の合計である「総合計」(*t*(105) = -1.76, *p* < .10) において, 群間の差に有意傾向が認められた。上記の有意傾向が認められたものについてはすべて, 不登校経験群の方が得点が低かった。「ソーシャルサポート」と「重要な他者」では, 群間に有意な差は認められなかった。

不登校経験に対する意味の付与および自己成長感とレジリエンスとの関連 Table 5に, 不登校の経験があると回答した男女20名のストレスに対する意味の付与尺度の3下位尺度とストレスに起因する自己成長感尺度の平均値と標準偏差を示した。

Table 6には, 不登校経験を有する者における各尺度間のスピアマンの相関係数を示した。「ポジティブな側面への焦点づけ」は「ソーシャルサポート」(*r* = .44, *p* < .10)と「親和性」(*r* = .41, *p* < .10), 「重要な他者」(*r* = .44, *p* < .10)との相関が有意傾向であり, 正の値であった。「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」は「重要な他者」と有意な正の相関が認められた (*r* = .51, *p* < .05)。自己成長感は「コンピテンス」(*r* = .55, *p* < .05), 「重要な他者」(*r* = .48, *p* < .05)と有意な正の相関が見られた。

Table 1 不登校経験の有無

	男性(%)	女性(%)	計(%)
あり	7(6.5)	13(11.2)	20(18.7)
なし	32(29.9)	55(51.4)	87(81.3)

Note.表中の数値は人数, 括弧内の数値は割合を指す

Table 2 不登校を経験した時期

	男子 (%)	女子 (%)	計 (%)
小学校	0	0	0
中学校	5(25)	7(35)	12(60)
高校	2(10)	4(20)	6(30)
小・中	0	1(5)	1(5)
中・高	0	1(5)	1(5)

Note.表中の数値は人数, 括弧内の数値は割合を指す

Table 3 不登校の継続期間

	男子(%)	女子(%)	計(%)
半年以下	1(5)	7(35)	8(40)
1年未満	2(10)	3(15)	5(25)
1年以上	1(5)	1(5)	2(10)
2年以上	2(10)	2(10)	4(20)
その他	1(5)	0	1(5)

Note.表中の数値は人数, 括弧内の数値は割合を指す

Table 5 不登校経験に対する意味の付与と自己成長感

	<i>M</i>	<i>SD</i>
ストレスに対する意味の付与		
出来事を経験した自己に対する評価	8.9	2.8
ポジティブな側面への焦点づけ	14.8	3.7
出来事のもつメッセージ性のキャッチ	11.2	3.1
ストレスに起因する自己成長感	11.1	2.5

Table 4 レジリエンス下位尺度の平均得点

	不登校経験あり		不登校経験なし		<i>t</i>	<i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
コンピテンス	16.9	4.4	18.5	4.0	-1.68	† -0.42
ソーシャルサポート	17.0	3.5	17.8	3.4	-.90	-0.22
肯定的評価	11.8	3.4	13.5	3.6	-1.93	† -0.48
親和性	10.1	2.9	11.2	2.6	-1.73	† -0.43
重要な他者	9.8	2.4	9.6	2.1	.37	0.09
総合計	65.6	10.5	70.6	11.8	-1.76	† -0.44

† *p* < .10

Table 6 各尺度の相関係数

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
レジリエンス								
I. コンピテンス	—							
II. ソーシャルサポート	-.08	—						
III. 肯定的評価	.41 †	.15	—					
IV. 親和性	.26	.49 *	.67 **	—				
V. 重要な他者	.01	.51 *	-.20	.08	—			
ストレスに対する意味の付与								
VI. ポジティブな側面への焦点づけ	.26	.44 †	.03	.41 †	.44 †	—		
VII. 出来事を経験した自己に対する評価	.36	.09	.06	.16	.14	.61 **	—	
VIII. 出来事のもつメッセージ性のキャッチ	.36	.06	.10	.11	.51 *	.66 **	.60 **	—
IX. ストレスに起因する自己成長感	.55 *	.37	.01	.24	.48 *	.53 *	.27	.37

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考察

不登校経験の有無による、レジリエンス特性の差について 不登校経験の有無で有意傾向の差が見られたものは「コンピテンス」「肯定的評価」「親和性」と、レジリエンス尺度の「総合計」の4つであった。有意傾向が見られたものに関しては、不登校経験群の方が得点が低かった。結果より、不登校経験を有することはこれらレジリエンスを低下させる要因のひとつと考えられる。Grotberg (2003) は既存のレジリエンス要因の促進や、存在しない、あるいは存在しても弱いレジリエンスを創造したり強化する必要性を述べており、そのための場として学校や地域などを重視している。大学生である不登校経験群は不登校未経験群よりもレジリエンスが低いことが示されたが、この結果は彼らがより良い不登校予後を送るためにも、その後の学生生活でどのような支援が必要であるかを考えるための重要な手掛かりとなる。

「コンピテンス」は、「どんなに困難な場面であっても、私は諦めない」や「努力すれば、どんなことでも自分の力でできると思う」といった質問項目から構成されている。本研究で不登校未経験群よりも不登校経験群のコンピテンスが低く示されたことは、不登校から回復して大学生となった現在もお彼らが不登校からマイナスの影響を受けており、努力を要する場面を事前に回避したり、困難な状況に遭遇した場合に容易に諦めてしまう可能性を示唆している。松井・笠井 (2012) は、不登校経験者は将来の自分を見据えて努力をするのではなく、自信のなさや不安に起因してより消極的な進路選択をしたり、高望みをしないで現状肯定のままやり過ごしてい

る可能性を指摘している。これが不登校経験群の「コンピテンス」が低く示された理由のひとつであると考えられる。また、不登校経験群は物事を楽観的に捉えられなかったり、あれこれと悩みこんでしまうため、「肯定的評価」が低く示されたと考えられる。不登校経験者は自信のなさから前向きになれなかったり、方策を考える以前に諦めてしまう傾向があるため、場面が変わったときに再び同じような問題にぶつかり、同じような不適応感をもつという悪循環が生じる可能性が指摘されており (松井・笠井, 2012)、先行研究との関連が示される。そして、不登校経験群は不登校未経験群よりも親和性の特性が低いことが示されたが、不登校予後の状態をより良いものにするためには、親和性の強化が重要であると考えられる。Agaibi & Wilson (2005) は利用可能な資源としての他者の存在の必要性を述べており、齊藤・岡安 (2010) は、「親和性」が学校や地域などで適応的に活動したり、利用可能な資源としての他者へ働きかける際に重要な要因となることを指摘している。彼らが不登校から回復した後も、再び大きな困難に直面したときに他者からの援助を受けやすかったり、置かれた環境に肯定的に接することが可能であれば、不登校経験から生じる不利益や、その他の身近な悩み・不安に必要以上に囚われることが少なくなるかもしれない。

不登校経験群のレジリエンス尺度と意味の付与尺度、自己成長感との関連 不登校経験群において、「ポジティブな側面への焦点づけ」は「ソーシャルサポート」、「親和性」、「重要な他者」との相関が有意傾向であり、正の値であった。結果より、ポジティブな側面に焦点づける

ことで「ソーシャルサポート」や「親和性」、「重要な他者」のレジリエンスが高くなると考えられる。これらレジリエンスはすべて他者との関わりを重視するものであり、不登校経験のポジティブな側面に意味づけができる者ほど他者と友好的に関わり、支援を受けやすいと考えられる。「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」は「重要な他者」と有意な正の相関が認められた。自己成長感には「コンピテンス」、「重要な他者」と有意な正の相関が見られた。また、「重要な他者」とは個人の人生において重要な意味を持ち様々な影響を与える人物のことを指す(齊藤・岡安, 2010)。不登校当時に関わった他者とその意味づけが、現在の支援の受けやすさに大きく影響しているのかもしれない。また、出来事のもつメッセージ性を受け取るほど「重要な他者」の得点が高かったことから、個人の人生に影響を与えた他者の存在は不登校予後の彼らの支えとなっていると考えられる。そして、不登校経験からの自己成長感が高い者ほど、「コンピテンス」、「重要な他者」の得点が高かった。不登校を乗り越えて成長を感じているからこそ、新しく困難な状況に直面してもそれを何とか克服してより積極的に未来を切り開いていきやすいと考えられる。

以上より、不登校経験のポジティブな側面に積極的に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かった者は現在のレジリエンス得点も高く、不登校予後がより良いと推測される。また、個人にとって意味のある重要な他者が得られると考えられる。不登校経験に対する意味づけ方の変化の過程やそこに自らの成長を見出すプロセスは、研究2の事例からより詳しく検討していく。

研究2

目的

過去に不登校経験をもつ大学生に対して、不登校経験に関する面接調査を行う。研究1では得られなかった点を質的な調査で検討し、彼らが不登校に至った経緯から、不登校当時に受けたサポート、不登校経験の意味づけ方、将来への展望などを探索する。そして質問紙調査で得られた結果と比較しながら考察を行い、不登校経験において意味づけ方を変化させることで予後の改善へと導ける方法を示唆する。

方法

調査対象者 研究1で配布した質問紙に、不登校経験に関する面接調査の募集用紙を添付した。不登校経験があると回答し、面接調査への参加を希望する者にはメールアドレスの記入を求めた。後日調査者が連絡し、参加を希望した大学生3名(男性2名、女性1名)を調査対

象とした。対象者の年齢は全員が20～22歳であった。

調査方法 2013年9月から10月にかけて、3名それぞれに面接調査を実施した。調査時間は1人につき約60分程度で、半構造化面接を行った。

調査開始前に研究の趣旨説明を口頭で行い、同意書への記入を求めた。面接内容の録音を依頼し、承諾が得られた場合には録音を行った。なお、録音を拒否した者はいなかった。同意書の内容は、答えづらい質問には無理に答えなくて良いこと、いつでも面接を中止できること、調査への参加は任意であること、個人情報の取り扱いを厳重に行う旨を記載し、すべてに同意を得た上で調査を行った。

面接に際しては、不登校経験の経過を視覚化できるように、各学年を学期ごとで割り振った表を用いて時系列を整理しながら、調査者と対象者の間で共有を図った。

面接参加者には、面接終了後にQUOカード500円分を進呈した。

質問項目 面接調査に用いた質問項目については、松坂(2010)の研究で用いたものを参考に作成した。質問項目は以下の通りである。

- ①不登校の経過を表すための質問群：「不登校経験のあらまし。いつ頃からいつ頃まで学校に行かなかったのか。その後の経過はどうか。」「不登校の最中に適応指導教室等、何らかの機関を利用したか。」「教師やスクールカウンセラー等、他者から何らかのサポートを受けたか。」「どんな出来事が印象に残っているか。」「自分に変化を感じるか。感じるとすればいつ頃、どのように変化したか。」「当時何か目標を持っていたか。」
- ②不登校経験の意味づけを尋ねる質問群：「不登校経験の意味づけ方のタイプ」「不登校経験は現在の自分にどんな影響を与えているか。」「不登校経験に対する見方の変化はあったか。あればいつ頃、どのように変化したか。」「不登校をしなければわからなかったこと、知り得なかったこと、できなかったことなど不登校ならではのことは何か思いつくか。」
- ③不登校経験の予後を尋ねる質問群：「大学進学を選んだのは何故か。」「その際に、周囲から何らかのサポートを受けたか。反対に、自分が求めていたサポートは何か思いつくか。」「大学進学を果たして得たものはあるか。」「大学卒業後の進路をどう考えているか。」

②において意味づけを尋ねる際には松下(2007)の「ネガティブな経験の意味づけ方のタイプ」に関する表を作成した。意味づけ方のタイプは、「苦悩継続型；過去：辛く苦しいもの、現在：辛く苦しいもの、未来：辛く苦しいもの」、「未来希望型；過去：辛く苦しいもの、現在：

辛く苦しいもの、未来：乗り越えていきたいもの」、「忘却楽観型；過去：辛く苦しいもの、現在：辛く苦しいもの・なんともないもの、未来：忘れていくもの」、「成長確認型；過去：辛く苦しいもの、現在：成長させてくれたもの、未来：だいじなものであり続ける」と上記以外のものを含む5つを対象者に提示して最も当てはまるものを選択させた。

将来に展望を持って面接を終了できることを考慮して、③の質問群では劳いの言葉かけを意識した。

結果

以下に、3つの事例について記述する。記述は個人のプライバシーを侵害しない範囲に留めた。

Aさんの事例 Aさんの回答の概要をTable 7に示した。Aさんにとっての不登校は、近い人との死別をきっかけに始まった。Aさんから語られた彼のその後の生き方や物事の考え方はこの当時の影響を大きく受けているように見受けられた。

Table 7 Aさん（男性、20歳、3年生）への面接調査結果表

不登校期間：中学2年生の2学期から中学3年生の3学期目前までの約1年間。
経過年数：不登校後約5年経過時点でのインタビュー。
調査に際して：不登校経験があったため。また、卒論の調査に関わるということで、来年度から始まる自身の卒業論文執筆の参考になると考えたため。
不登校終了のきっかけ：商業科の全日制高校へ進学後。
不登校状態に至るまでの経緯：面倒をみてくれていた人と死別し、中学2年生の2学期から不登校に。
居場所経験：学外の機関はなし。その間は自宅で過ごす。
その他利用機関：外出する勇気は必要だったが、習っていた武道の道場へは通っていた。
他者からのサポート：死別した人の親御さんが干渉することなく、のびのびと家にいさせてくれた（家庭環境の詳細は語られず）。
語られた出来事：きっかけが死別であったため、生物学などの本・論文を読み漁って、その人と何とかしてもう一度会うための方法を模索していた（不登校になった頃から中3の4・5月頃まで）。
不登校以降の自身の変化：高校生くらいのときから物事に執着しなくなった。生死などから距離を置いて見ている自分がいて、今なおそれは続いている。友人らから「大人っぽい」「冷静」などと言われ驚いた。今でも言われる。
不登校当時の目標：当時からの自身の関心事が、今心理学を学んでいる理由と繋がっている。
不登校の意味づけ方のタイプ：成長確認型。高校生の頃や不登校経験から近かった当時は、あまり思い出したくないしポジティブな感情はなかったと思う。最近になってから、成長させてくれたと思えるようになった。未来は教訓になっていくだろうと思いたい。
過去：辛く苦しいもの。現在：成長させてくれたもの。未来：だいじなものであり続ける。
意味づけ方の経過：不登校が終わって距離が置けるようになった頃（高校3年～大学生になってすぐ）、お墓参りに行ったりとか考えていくうちに徐々にすっきりとしていった。
不登校が現在に与える影響：一番は、生死観。心地いいものではないが、いざ目の当たりにして、終わりがある分四季や季節観を大切にするようになった。人生と季節を結びつけたりとか。一言で言うと「森羅万象・花鳥風月」。
経験しないとわからなかったと思うこと：他人に依存していたのだなと思った。不登校になって考えるようになったのは、人の言動にはその人の世界観が投影されている、ということ。その人の理想や希望が入っているのだと思う。
大学へ進学した理由：自分の関心と間接的に重なっていたのが心理学だったが、それに関係なく大学には行くと思っていたし、浪人してでも大学へ行った方が楽だと思っていた。
大学進学を決めた際、周囲から受けたサポートと、反対に自分が求めているサポート：金銭的な不安はあったが、その面でのサポートがあったおかげで今やっつけられる。学費の半分は1・2ヶ月後にアルバイト代で返している。進学対策は高校の先生から受けた。当時の自分が求めているサポートなどは特にない。
大学進学を果たして得たもの：自分もいずれ死にゆくが、どれだけこの世に未練を残さず生きていけるか。長期休暇の際には自転車で色々なものを見て回ったり。とにかく思いついたことはやっつけたい。
大学卒業後の進路について：大学院か他の大学（医学部）に行つて心理学を究めたい。それが就職につながったらいいかな？

死別を原因として不登校となったAさんはその人となんとかしてもう一度会いたいと願い、不登校であった当時は生物学などの本や論文を読み漁った。Aさんにとって不登校期間は、まさに死別体験からの立ち直りに必要であったのだろう。その後、中学3年の冬休みに中学側がAさんに対して補習や試験を行ったことにより、それがAさんの全日制高校進学へと繋がった。

高校の授業で偶然にも心理学の存在を知ったAさんは、自身の関心事と重なっていたことから心理学を学べる大学に進学する。また、大学へ進学する頃から今現在に至り、徐々にAさんの不登校当時の出来事に対する見方に変化が訪れたという。「こんなこともあったけど、重く受け止めなくなった」「最近になってゆっくりする時間も増えて、自分の経験として身体の中にあるから、それなら一層忘れるより受け止めた方が良いのではないかと思うようになった」という言葉から、Aさんの過去の経験を受け入れるという作業は、ある程度の時間の経過が必要であったように思われる。また、大学生という人生の中でも特有の時間を過ごしたことから時間的余裕も生まれ、それが結果としてAさん自身の死生観や生き方の形成へと繋がっていく過程が窺えた。

大学卒業以降も心理学を追究したいというAさんにとって、不登校のきっかけとなった出来事と不登校の最中の出来事が大きく影響しているのであろう。

なお、研究1で回答を求めたAさんの質問紙の得点は、レジリエンス尺度では「コンピテンス」が15、「ソーシャルサポート」が17、「肯定的評価」が13、「親和性」が9、「重要な他者」が12であり、「総合計」が66であった。意味の付与尺度においては、「出来事を経験した自己に対する評価」が9、「ポジティブな側面への焦点づけ」が15、「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」が16であった。また、自己成長感尺度は10であった。Aさんに回答を求めた質問紙の得点は、上述の不登校経験者全体の平均得点と同程度のものであった。しかし、Aさんの回答では「重要な他者」と「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」が平均得点よりやや上回っていた。面接の際にAさんから語られたのは、近い人との死別から不登校が始まりそれをどう克服していくかという過程であった。Aさんはこの経験が意味するものを感じ取り、その上でこれからどう生きていくかを考えるきっかけになったと考えられる。そういった意味でもAさんの「重要な他者」と「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」の得点が平均よりやや高かった点も納得できる。

Bさんの事例 Bさんの回答の概要をTable 8に示した。Bさんの不登校は、自身のコンプレックスから始

まった。それをきっかけに中学を欠席し始めたBさんであったが、次第にBさんのなかで物事の考え方に変化が訪れる。「不登校期間は自分らしさが作られた期間。自分を作っていた期間」と語られたように、不登校期間のBさんの思考はその後の人生に少なからず影響を与えたと言えよう。また、Bさんが自身の不登校を肯定的に捉えられている理由のひとつとして、中学卒業後に進学した通信制高校での経験が挙げられる。高校で生徒会や学級委員、クラブの部長など責任のある仕事を成し遂げたことによって達成感が生まれ、それが自信として蓄積されたことが大きかったと言える。そこでの経験が自身を認め、受け入れることを可能にしたのであろう。不登校の経験についての意味づけ方を尋ねた際には、「客観的に見たらマイナス面もあると思う」と自身の経験を振り返りながらも、「中学3年になり進路を考え始めたとき、小論文を書く際にはこの経験が強みになった」とこの頃からの不登校経験に対する見方の変化が具体的な内容として語られた。

また、Bさんとの面接を通して印象的であったのは、不登校当時から将来の就職に際しての考えがBさん自身のなかにあったことである。それ故か今回の面接調査では「就職」「仕事」というキーワードが比較的多く出てきた。しかしBさんの「自分の強みを生かして働きたいという気持ちがある」との言葉通り、Bさんは高校卒業後、就職というひとつのゴールを見据えてその“強み”を生かした上での大学進学を経てきたように見受けられた。大学進学という進路を自身で決めてきたBさんであったが、「両親（特に母親）が話をよく聞いてくれたのが支えであった」との気づきが今回の面接調査を通じて改めて発見されたようであり、親や教師といった周囲からのサポートは欠かせないと考えられる。

大学卒業後、進学してもなお心理学を究めたいというBさんの人生に不登校当時の影響が今も大きく関与していると言えよう。

なお、研究1で回答を求めたBさんの質問紙の得点は、レジリエンス尺度では「コンピテンス」が26、「ソーシャルサポート」が17、「肯定的評価」が10、「親和性」が11、「重要な他者」が10であり、「総合計」が74であった。意味の付与尺度においては、「出来事を経験した自己に対する評価」が14、「ポジティブな側面への焦点づけ」が20、「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」が16であった。また、自己成長感尺度は14であった。Bさんに回答を求めた質問紙の得点と不登校経験者全体の平均得点を比較すると、意味の付与尺度および自己成長感尺度の得点が大きく上回っていた。また、「コンピテン

ス」も際立って高かった。Bさんは「不登校期間は自分らしさが作られた期間。自分を作っていた期間」だと語り、自身の不登校経験を比較的受容している印象を受けた。今回の質問紙に現れた得点は、高校生活で得た自信

や、その後の進路を積極的に切り開くことでもたらされた意味づけであり自己成長感であると考えられる。

Cさんの事例 Cさんの回答の概要を Table 9 に示した。Cさんの不登校は、前述した2人と比較すると長

Table 8 Bさん(男性, 22歳, 3年生)への面接調査結果表

不登校期間：中学1年(11月頃から中学1年最後まで)・中学2年(後期いっぱい)・中学3年(1年間)
経過年数：不登校後約7年経過時点でのインタビュー。
調査に際して：不登校が過去のものになっているし、自分の経験が誰かの役に立てるのならという思いから。いやな気持ちはない。
不登校終了のきっかけ：高校へ進学してから。通信制高校であったが週5日(朝から夕方まで)の日課でほぼ皆勤だった。周囲の生徒も不登校経験があつて似ていたから過ごしやすかった。
不登校状態に至るまでの経緯：中学1年の夏頃、周囲のおしゃれ意識が高くなるとともに自身の髪にコンプレックスを抱くようになり、それが原因で授業に集中できなくなる。中学1年の11月頃から不登校となり、その後中学を卒業するまで出欠席を繰り返す。
居場所経験：学校外の機関はなし。その間は自宅で過ごす。
その他利用機関：中3の前期から後期の始めくらいまでに、親や教師からのすすめで5回ほどスクールカウンセラーを利用するも、特に必要性を感じなかった。
他者からのサポート：担任教師から高校進学のための支援。高校の推薦を受けるために中学の校長に懸けあってくれる。親がよく話を聞いてくれたため、スクールカウンセラーなどは必要なかった。
語られた出来事：好きなバンドに出会えたこと。今の自分を認めてくれたような…すごく励まされた。
親に申し訳ないという気持ちが当時はあった。哲学的な考えに影響された。何が正しいのか、そんなことはわからないし、だからこそどんな大人になればいいのかわからなくなり悩んだ。不登校になってすぐは家に居ることの罪悪感が大きかったが、徐々に考えることも変化していった。
不登校以降の自身の変化：不登校が悪いものだと思わなくなった。高校に進学して、普通の生活が送れるようになったことが大きかったのだと思う。
不登校当時の目標：大学には進学するつもりだった。行かないと働けないだろうから、それだと生きていけない。だから、大学に行って普通に働くことが目標だった。
不登校の意味づけ方のタイプ：成長確認型。将来的にはだいたいなものになるだろうが、客観的に見るとさまざまなマイナス面もあるのだろう。
過去：辛く苦しいもの。現在：成長させてくれたもの。未来：だいたいものであり続ける。
意味づけ方の経過：中学3年の終わり頃に進路を考え始めたとき、小論文を書く際にはこの経験が強みになった。その頃から辛くて苦しかった経験が徐々に変化していった。
不登校が現在に与える影響：世の中の見方や、物事の考え方の全てが変わった。善悪の考え方も変わった。
経験しないとわからなかったと思うこと：不登校になって時間的ゆとりが生まれたことから、色々なことをゆっくり考えることができた。物事を様々な角度から見られるようになったし、優しさに対しては感謝する気持ちが強くなった。
大学へ進学した理由：仕事を探していく上で、大卒でないと働く場がないのではないかという不安から。
大学進学を決めた際、周囲から受けたサポートと、反対に自分が求めていたサポート：親はしたいようにすれば良いという考え方であったし、誰かからサポートを受けたということはなかった。サポートは必要でなかった。今現在はカウンセリングを受けたいと思ったりすることもある。
大学進学を果たして得たもの：以前の大学で哲学を学び、哲学者の考え方に触れて、似たようなことを考える人は昔にもいたんだ、自分の考え方は間違っていなかったのだとわかった。今の大学でそれを現実的なものにできた。仕事に自分の考え方を生かせるだろう。以前の大学では考えを深めて、今の大学ではそれをどう生かすかということ学んでいる。だからどちらの大学での経験も大切。
大学卒業後の進路について：心理系の大学院に進みたい。研究者になるか実践家になるかは迷う。

期に渡っていたと言える。Cさんのなかで不登校に至った明確な理由はなかったが、強いて言うなら家で過ごす時間の方が好きであったと語られた。不登校であった小学生の頃から中学を卒業するまでの期間は主に自宅で過ごしたが、その後進学した通信制高校へは1日も欠席することなく登校できたと語った。通信制高校のスタイル

が自分のペースに合っていたことで、ここでの生活が自信へと繋がり、大きな転機となったようである。

この頃から、過去の不登校に対して比較的肯定的に受け入れることが可能となり「勉強ができないことや青春や思い出、写真がないことがコンプレックス。人とは違う。学校へ行ってなかったことは勿体ないと思う」「もっ

Table 9 Cさん(女性, 22歳, 4年生)への面接調結果表

不登校期間：小学校1年～中学3年まで。その間出欠席を繰り返す。
経過年数：不登校後約7年経過時点でのインタビュー。
調査に際して：何か協力できればと思います。
不登校終了のきっかけ：高校へ進学してから。通信制高校のペースが自分に合っていた。毎日だったら休んでいたかもしれないが。
不登校状態に至るまでの経緯：特になし。休み癖がついていた。
居場所経験：なし。その間は自宅で過ごす。
その他利用機関：中学3年の頃はNPO法人の不登校支援スクールで個別に勉強を教えてもらっていた(週2回2時間)。良かった。先生が優しいし、不登校を理解している。
他者からのサポート：小学生の頃は先生が家に来て勉強を教えてくれていた。当時は嫌だった…。保健室の先生が好きだった。
語られた出来事：一番印象深いのは私立中学を親が辞めてきたこと。行きたくて入学したのだから通いたい気持ちはあった。だからショックだった。それ以降は心が荒んでいたし、居場所も感じられず、申し訳ない気持ちだった。小学生の頃の記憶はない。親は怒っていたし、不登校を受け入れてくれるまでに時間がかかった。最後まで「行かなくていい」とは言ってくれなかった。
不登校以降の自身の変化：高校3年くらいから楽しいことを楽しいと思えるようになった。罪悪感や落ち込むことも減った。通信制高校でも行けていることへの自信が大きかったのだと思う。親が認めてくれたこともある。
不登校当時の目標：具体的な目標はなかった。若いから漠然と何にでもなれると思っていたし、頑張ればいけると思っていた。比較対象がなかったからかもしれない。
不登校の意味づけ方のタイプ：成長確認型。不登校があったから今の自分がある。
過去：辛く苦しいもの。現在：成長させてくれたもの。未来：だいじなものであり続ける
意味づけ方の経過：明確には高校生になってから、過去の経験が「成長させてくれたもの」だと思えるようになった。高校に通えるようになったことが自信として大きく関係している。
不登校が現在に与える影響：不登校がなかったら心理学はやっていない。「そういった意味では不登校のせい。不登校じゃなかったらこの大学には来ていなかったと思う」
経験しないとわからなかったと思うこと：不登校への理解はあると思う。そう思わないとやっていられない気持ちもある。勉強ができないことや思い出がないことがコンプレックス。人とは違う。学校へ行ってなかったことは勿体ないと思う。
大学へ進学した理由：指定校推薦で行けたから。働くのは無理だし、思い出を作ろうという軽い思いから。親も「卒業できたらいいね」と言っていた。
大学進学を決めた際、周囲から受けたサポートと、反対に自分が求めているサポート：高校3年で進学を決意。高校の先生に面接の練習をしてもらった。高校は良かった。色んな人がいたし、どんな自分でもアリだった。当時のサポートに満足している。
大学進学を果たして得たもの：世間の荒波に揉まれた気がする。友だち関係から、色々と影響を受けた。言われたことを素直に受け止めたりといった純粋さがなくなったかもしれない。理想としていた学校生活とは違ったが、学校生活というものがわかった。
大学卒業後の進路について：大学院進学を考えているが、まだ未定。

と勉強しなかったという悔いもある」と不登校ならではの後悔を語りつつも、「不登校に対しての理解はある方だと思う。そう思わないとやっつけられない気持ちもあるけれど」と自身の不登校経験を振り返った。また、高校へ通える自分を受け入れられたことによって、「楽しいことが楽しいと思えるようになった。罪悪感がなくなったし、落ち込むことも減った」と言う。高校卒業後は大学へ進み、学校生活をより体感したことで「理想としていたものとは違ったが…」と語りながらも「大学に行けたことは良かった」と自身の大学生活を位置づけた。大学進学後は大学院へ進む道を考えているが「勉強ができないことへのコンプレックスを払拭するためでもある」という葛藤も語られた。

Cさんのなかで、高校生活で得た自信がその後の進路にも少なからず影響したと言える。こうした経験から自身の不登校経験を“成長確認型”だと意味づけるCさんだが、今回の面接調査で所々に語られた否定的側面もまた同時に強い存在感をもっていると考えられた。

なお、研究1で回答を求めたCさんの質問紙の得点は、レジリエンス尺度では「コンピテンス」が20、「ソーシャルサポート」が15、「肯定的評価」が11、「親和性」が7、「重要な他者」が10であり、「総合計」が63であった。意味の付与尺度においては、「出来事を経験した自己に対する評価」が9、「ポジティブな側面への焦点づけ」が16、「出来事のもつメッセージ性のキャッチ」が12であった。また、自己成長感尺度は11であった。Cさんに回答を求めた質問紙の得点は、不登校経験者全体の平均得点と同程度のものであったが、「コンピテンス」においては少々上回った。Cさんの不登校期間は、Aさん、Bさんと比較すると長期に渡っていたためか、後悔や葛藤も他の2人よりも具体的に語られた。それ故、意味の付与尺度や自己成長感尺度においても他者と比較して目立った得点としての結果は表れなかったのかもしれない。しかし、面接調査では高校に進学し、それをきっかけに不登校を卒業できたこと、自信を得られたこと等が語られ、過去よりも成長できたと感じている様子が見受けられた。

考察

不登校からの回復 今回面接調査を行った3名に共通して言えることは、中学生のうち不登校を終えて、高校時代を自分なりに納得のいく形で過ごせたことにある。

Bさん・Cさんは中学卒業後は通信制高校へ進学した。そこでの生活をBさんは「周りの子も不登校経験があっただけで、似ていたから過ごしやすかった」と語り、Cさんは「色んな人がいたから、どんな自分でもアリだった」と

語った。通信制高校での過ごしやすさが、「学校へ行く」という過去の自分が出来なかったことを可能にし、それが自信へと繋がったことが示唆される。中学3年時に不登校を経験した者を対象に行われた森田(2003)の追跡調査では、就学も就労もしなかった者と比較して、仕事であれ学校であれ、社会的な所属先を持つ者の方が、自らの出会いや経験を評価し、その経験が将来の生きる自信につながるということが明らかにされている。しかし学校卒業後、学校にも仕事にも所属しなかった生徒の中には、その後も自分の居場所を見つけられずにいる者の割合が高くなるとされ、伊藤・小澤・安田・星野・福智・近兼・原・鶴岡(2013)は仕事・学校を問わず、社会とのつながりの糸(social bond)を結ぶことが重要であると指摘した。この見解は本研究で得られた結果とも一致し、不登校児童・生徒の受け入れを積極的に行う定時制・通信制高校やサポート校といった場合は非常に有効であると考えられる。しかし、Aさんからは不登校であったことと同時に不登校のきっかけとなった出来事乗り越えていく過程が語られたため、高校へ通うことができた事実以上に、ある程度の時間の経過が必要であったとも解釈できる。

今回の面接調査では義務教育終了を間近に控えた際に、彼らの進路面でのサポートを主にしたのは中学校の教師であったことが語られた。例えばCさんから「当時は嫌だった」と語られたように、家で学校の教師に勉強を教えてもらうといった行為に抵抗を示す児童・生徒もいるはずである。しかし、彼らの人間的な成長発達の促進を目指した際には進路や学習面でのサポートも不可欠となってくるということが考えられるため、適切な時期や状況の見極めが重要となってくるであろう。なお、心理的サポートとして働いたのは、不登校期間中に家で過ごすことに対して受容的であった家族や両親の存在であったと考えられる。Bさんは、スクールカウンセラーを数回利用するも、話し相手には家族がいたから必要性を感じなかったと語った。Cさんの場合は、両親が不登校を受け入れてくれるまでには時間がかかったし、最後まで「(学校に)行かなくてもいい」とは言ってくれなかった、と明かした。しかし、高校に通えるようになったことで両親が認めてくれたことが自信になったという過程から、やはり家族や両親からの心理的なサポートは非常に重要なものであると考えられる。松井・稲垣(2008a, b)は、不登校児童生徒への支援には利害関係を越えた第三者が望ましいことを指摘しているが、本研究では家族の受容的態度の重要性も示された。これらを踏まえると、学習・進路における側面をサポートする学校教諭、心理・情緒

的サポートを行う両親や家族、そして中立的な立場で関わり、時に両者の役割をも担うスクールカウンセラーや養護教諭といった立場が重視されるであろう。

不登校経験の意味 今回面接調査を行った3名は共通して、“成長確認型”あるいは成長確認型に最も近いと自身の不登校経験を意味づけた。

意味づけ方の変化の過程を事例より見ていくと、Aさんは時間の経過と内省によって変化していき、Bさんの場合は、不登校期間中に得た物事に対する考え方を自分の“強み”として捉えてその後の進路を歩んできたと考えられた。Cさんも、「不登校があったから今の自分がある」という自分らしさを経験上に見出していることが明らかになった。しかし、今回対象とした大学生も松坂（2010）の研究結果と同様に、調査の節々で不登校経験から生じる不利益や否定的側面の存在を明らかにした。それは「勉強ができないこと」「思い出がないこと」など他者との違いがコンプレックスとしてあげられたり、「客観的に見たらマイナス面もあると思う」という広義のものであった。松坂（2010）は不登校経験者が不登校以後の生活を送るなかで、過去の経験がもたらした利益を見出し、弊害と利益を並置させることによって弊害による問題化を防ぎ、不登校経験を人生の一段落として位置づけることが可能になったと指摘する。肯定的側面と否定的側面を総括した上での“成長確認型”であることは現役の大学生であっても同様であり、不登校以降のポジティブな経験がその意味づけに大きく関与していた。

大学へ進学するということ 今回面接調査を行った3名は高校卒業後に大学へ進学した。Aさんは自身の興味や目的と近接した学問を学ぶための大学進学であった。Bさんは、将来就職を考えた際に選択の幅を広げるため、大学進学を経てきた。Cさんの場合は学校生活での経験が少ないことから、何らかの思い出をつくることで、と指定校推薦制度を用いての進学であった。また、Cさんは「働くことは無理だから…」と語り、高校卒業後すぐに就職することへの不安からの進路選択であったとも考えられた。松井・笠井（2012）は、不登校経験者の高校進学に関して「自分は不登校だから、この程度で…」などといった理由から、自らの意志で進路選択をしているつもりでも、実は不登校経験からの影響を受けてそう選択せざるを得ない、もしくは自身の抱える問題に直面しないための選択になってはいないか、との指摘をしている。この指摘については、大学進学に関しても共通する点がある可能性は否めない。しかし、不登校経験者であっても大学に進めば「不登校」という枠で扱われることはなくなる。大学生活をモラトリアム期間であ

ると考えた場合、自分の興味関心を追究する場であることはもちろん、「不登校ではない自分」が学生生活を新たに謳歌する場であってもそれは不登校経験者にとっては非常に意味のある期間だと考えられる。今回面接調査を行った3名が自身の不登校経験を“成長確認型”だと意味づけていることは上述したとおりであるが、意味づけ方の変化が明確に訪れたのは高校に進学して、自分なりの学校生活が確立されて自信を得た故であったと考えられる。Aさんの場合は、不登校経験そのもの以上に死別という事実を受け入れることが必要であったと推測されるため、他の2人と比較すると異なる点はあるが、時間的ゆとりのある大学での生活は自らが今まで歩んできた道を振り返った上で、今後の生き方を考える場として有効であったと考えられる。

また、大学生活を送ることで今までの学校生活では経験できなかったことを友人関係から学ぶことができた、と語られた。このような語りから、不登校当時と比較すると自分への自信や満足感も少なからず上昇していると言える。しかし、今回面接調査を行った3名が共通して大学卒業後の進路に大学院や他の大学への進学を主に考えていると挙げたことは、単に学問の追究だけが理由だとは言いつれないかもしれない。実際にBさんからは「今現在、カウンセリングを受けたいと思うことがある」と語られた。これは不登校以後も何らかの不安を継続して抱えている可能性が示される。不登校経験の有無に関わらず青年期に大きな問題に直面することは必然であるが、不登校から生じた弊害がその問題を更に大きくしていたり、不登校最中の問題から本人が未だ抜け出せていないのかもしれない。不登校経験を“成長確認型”と意味づけていても、学生という括りから外れて社会へ出ることへの不安感を抱えている場合は、両者の因果関係も含め、事実上の不登校が終了した後の支援や彼らの在り方などに関してもより詳細に検討していく必要がある。

総合考察

研究1より、不登校経験の有無でレジリエンス尺度の得点の差を検討したところ、有意傾向が見られたものは「コンピテンス」「肯定的評価」「親和性」と、レジリエンス尺度の下位尺度全てを合計した「総合計」の4つであった。有意傾向が見られたものに関しては、不登校経験群の方が得点が低かった。不登校経験を有することはこれらレジリエンスを低下させる要因のひとつと考えられる。しかし、不登校経験のポジティブな側面に意味づけをしたり、不登校経験による自己成長感が高かった者は現在のレジリエンス得点も高く、不登校の予後が比較

的良いということが示唆された。

研究2では、より当事者側の視点を重視して、過去に不登校経験がある大学生を対象に調査を行った。今回面接調査を行った3名は、不登校経験から生じる不利益を認めながらも、そこに自分なりの価値を見出して“成長確認型”であると意味づけていた。そこには、中学生のうちに不登校から卒業し、不登校当時よりも成長できた実感でできる経験を重ねることが重要であると考えられた。松下(2008)は、ネガティブな経験をして、どうにか対処したことで得た新しい気づき、よりよい対処法の獲得、対処するなかで得た新しい人間関係、対処してきた自分に対する乗り越えた自信といったものが肯定的意味づけと深く関連していることを指摘している。その意味づけの変化には家族や教師といった他者と関わることで継続的に支援を得られたこと、そして不登校を乗り越え、確かな自信として彼らのなかに蓄積されたことが不登校予後の彼らの支えとして大きく働いたと考えられた。

以上のことから、不登校を経験することは多くの不利益をもたらすレジリエンスを低下させると考えられるが、より良い不登校予後を送るためには、不登校経験の意味づけを変えることが重要であると考えられる。そのためには、他者からの支援が得られること、不登校を卒業して過去の自分よりも成長したと本人が実感できるようなポジティブな経験を重ねることが不可欠である。そうすることで「成長」としてその者の人生のなかに取り込まれていくと考えられた。また、大学生として過ごす時間は、不登校経験を振り返りながら今後の生き方を考える場として有効であろう。不登校経験者にとっては過去に経験できなかった学生生活を新たに経験する場ともなり、その意味づけや自己成長感に大きく関与していると考えられた。

次に、本研究の限界点と今後の課題を述べる。第一に、不登校経験をもつ大学生を調査の対象として限定したことで、それ以外の者のデータを収集していない点である。同年代の専門学生や就職をした者たちに本研究で得られた結果が一般化できるのかは定かではない。そのため、義務教育を終えた者たちの進路状況を考慮し、不登校の原因や不登校後の進路ごとに分類した不登校経験者の語りを聴取することが必要であると考えられる。第二に、2つの研究で不登校経験群のサンプル数が少なかった点である。研究1では不登校経験の有無でサンプルに偏りが見られたため、不登校経験群のサンプル数を増やして比較検討を行う必要がある。研究2の面接も3名という限られた対象者への調査であったため、サンプル数を増やす

ことでより精緻な結果を得ることができよう。第三に、研究2では不登校を経験した大学生の回復過程を示唆する知見が得られたが、それらが質的なデータであるという点である。今後は質的なデータの分析結果をもとに、数量的なデータで示唆されたメカニズムを検討していく必要がある。第四に、研究2の面接調査では不登校から受けている不利益を想定して、大学生である彼らが今求めている支援を併せて調査できなかった点である。不登校予後の負担を軽減させるためにも、今後は不登校経験の不利益をより明確にし、それらへの具体的な対処法を考えなければならない。

本研究では上記に挙げた多くの課題が残るが、不登校の当事者を身近で支える近親者や、臨床心理士および教師たちにとって、有効な支援を考える際に貴重なものとなるであろう。また、本研究で得られた知見を踏まえて、不登校経験への意味づけ方を変えるための相応しい支援の在り方を示唆することで、不登校経験者が自らの不登校経験を成長のきっかけとして人生に取り込んでいけるようになることを期待する。

引用文献

- 学校不適応対策調査研究協力者会議(文部省)(1992a). 登校拒否(不登校)の問題について——児童生徒の心の居場所づくりを目指して——
- 学校不適応対策調査研究協力者会議(文部省)(1992b). 登校拒否問題への対応について
- Grotberg, E. H. (Ed.) (2003). *Resilience for today*. Westport : Praeger Publishers.
- 伊藤美奈子(2009). 不登校——その心もようと支援の実際——金子書房
- 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞(2013). 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連——通信制高校に通う生徒を対象とした調査から—— 社会学研究科紀要, **75**, 15-30.
- 貴戸理恵(2004). 不登校は終わらない——「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ—— 新曜社
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy N. (1990). Resilience and development : Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425-444.
- 松井美穂・笠井孝久(2012). 不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの——不登校経験の意味づけと影響—— 千葉大学教育学部研究紀要, **60**, 55-62.
- 松井理納・稲垣応顕(2008a). 不登校経験者の自己省察に関する研究(2) 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, **2**, 95-101.
- 松井理納・稲垣応顕(2008b). 不登校経験者の自己省察に関する研究(3)——時間的展望の変化に着目して—— 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, **3**, 93-101.
- 松坂文憲(2010). 不登校経験者が語る“不登校経験の意味——自己資源化の可能性”の提案—— 岩手大学大学院人文社会科学部研究科研究紀要, **19**, 39-56.

- 松下智子 (2007). ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連——ナラティブ・アプローチの視点から—— 心理臨床学研究, **25**, 206-216.
- 松下智子 (2008). ネガティブな経験の意味づけ方の変化過程——肯定的な意味づけに注目して—— 九州大学心理学研究, **9**, 101-110.
- 文部科学省 (2013). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 森田洋司 (2003). 不登校—その後—不登校経験者が語る心理と行動の軌跡—— 教育開発研究所
- 大嶋由紀 (2005). 不登校経験者が捉える不登校経験の意味 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要・心理発達科学, **52**, 264-265.
- 齊藤和貴・岡安孝弘 (2010). 大学生用レジリエンス尺度の作成 明治大学心理社会学研究, **5**, 22-32.
- 高木隆郎 (1984). 登校拒否と現代社会 児童青年精神医学とその近接領域, **25**, 3-77.
- 宅香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討——ストレスに対する意味の付与に着目して—— 心理臨床学研究, **23**, 161-172.